

OVERWATCH 2

ショックウェーブ



BRANDON EASTON 著

ストーリー
BRANDON EASTON

編集
CHLOE FRABONI

ストーリー監修
MADI BUCKINGHAM

クリエイティブ監修
*JEFF CHAMBERLAIN, JUSTIN GROOT,
GAVIN JURGENS-FYHRIE, AARON KELLER,
MIRANDA MOYER, DION ROGERS, ARNOLD TSANG*

プロデューサー
BRIANNE MESSINA

デザイナー
COREY PETERSCHMIDT

画
VALENTINA REMENAR

ソジョーン オリジナル・コンセプト
ARNOLD TSANG

ソジョーン オリジナル・モデル
PAUL WARZECHA

ソジョーン オリジナル武器モデル
KYLE RAU

ショックウェーブ



カナダ、オンタリオ州、トロント
ヤング・ストリートとエグリントン・アベニュー・イーストの交差点
10:05 AM 東部標準時

ソジョーンが意識を取り戻すと、そこは空中だった。気絶していたのはほんの一瞬だったが、銃撃戦においては生死を分かち隙となる。こういう瞬間、今までの人生が目まぐるしく回想されるという話はよく聞くが、ソジョーンはそれが事実ではないことを知っていた。戦場で人間の精神がどのように自衛本能を働かせるかを熟知していたのだ。

ソジョーンの体はコンクリートに叩きつけられた。落下の衝撃は全身を駆け抜け、彼女はつま先から歯の奥まで痺れるような苦痛を味わった。神経系は無事だ、よかった。耳の後ろでプツツ、ザーツという音がする。続いて体内にインプラントされた通信システムから、断続的な雑音と、心配そうな焦った声が聞こえてきた。

「チェイス。こちらトレンブレイ！聞こえるか？繰り返す……」

トレンブレイの声が不安定になり、大音量の雑音にかき消された。これが示す可能性は二つ。通信システムが爆発の衝撃で損傷を負ったか、エージェント・トレンブレイと司令部が攻撃を受けたかだ。

どちらも厳しい展開だ——ソジョーンは今までトレンブレイの情報を元に防衛戦を指揮しながら市民を避難させていた。

申し合わせたかのように、公共放送が大音量で通りに響く。落ち着きはらった、権威が感じられる声が市民に語りかける。

「市民の皆さん、避難先はフェリー乗り場です。船で安全な場所へ移動してください。繰り返します。全市民はフェリー乗り場に向かってください。これが避難する最後のチャンスかもしれません」

ソジョーンは立ち上がった。視界が開けてくるにつれ、体のふらつきも収まっていった。ライフルを胸の前に構え、銃身に備え付けられたスコープを覗き込む。周りに立ち込める濃い煙と燃え盛る炎が、最悪の事態が起こったことを彼女にまざまざと見せつける。ヌルセクターは、大勢の人で賑わうトロントでも有数の交差点に巨大なガンナー・ユニットを展開し……目的を果たしたのだ。

市街地は戦場と化していた。

都市を覆う分厚い雲の中からヌルセクターの司令船が降下してきたのは、ほんの十分前のことだった。一分も経たないうちに数百ものヌルセクター・ユニットがトロントのミッドタウンと、湖に面する南部に現れた。ソジョーンは過去にもヌルセクターと戦ったことがあったため、彼らの強襲戦術に関する知識を備えていた。彼らはまず、数でターゲットの都市を圧倒する。その間に選りすぐりの部隊が発電網の要衝や、都市の防衛に必要なインフラ設備を叩くのだ。

しかし、今回は以前ヌルセクターの侵略部隊と交戦したときよりも精度が増していると感じた。純粹な破壊行為ではなく、まるで何か目的のために戦っているかのようだ。襲撃が始まってからプロバガンダのメッセージが延々と流されていたが、じっくり聞く余裕などなかった。

ヌルセクターの効率的で容赦のない攻撃パターンは、軍所属の戦術家であるソジョーンが思わず感心してしまうほど見事だった。しかしそんな気持ちも、再び爆発が起き超高温の埃と破片を浴びせられた瞬間に霧散した。

ソジョーンは爆風に飛ばされないよう踏ん張る。サイバネティクスで強化された肉体は、人間離れした強靭さを誇る。

彼女の背後ではカナダ軍と、トロント警察の戦術部隊である緊急タスクフォースが前進しつつあった。通常肉体を持つ彼らは、この衝撃波を耐えられないだろう。

「伏せなさい！」

ソジョーンに従い、兵士たちが身を伏せる。ほとんどは難を逃れたが、運悪く紙

吹雪のように宙を舞う者も数名いた。その体は商業地区のきれいに手入れされたビル群めがけて飛ばされていく。煙が晴れ、ソジョーンは後ろにいる兵士たちの呆然とした表情を見つめた。ほんの一瞬で彼らの友人が、味方が、命を失った。

たった一瞬が生死を分かつ。

仲間を失いショック状態の彼らに再び戦意を吹き込むのは自分の役目だ。仲間の死に気を取られて動けない時間があと数秒でも続けば、戦いの流れをヌルセクターに明け渡すことになるだろう。地響きがする。ガンナー・ユニットが迫って来ており、キャノンアームが回転を始めていた。掃射が始まれば、ひとたまりもない。

聞こえているならここに集合しなさい」

ソジョーンの研ぎ澄まされた自信に満ちた声を聞いた兵士たちは戦闘態勢に戻った。

「小火器を装備している者は制圧射撃を。ヘビー・ガンナーの足元を狙うのよ。エネルギー武器や強化爆薬を持っている者は通りの両側に展開。車両の残骸に身を隠せ。安全を確保したらキャノンに攻撃を集中」

カナダ軍兵士と緊急タスクフォースは流れるように役割ごとの市街戦陣形を取った。ソジョーンは所属のバラバラな警察官と兵士の混合部隊を見やると、動かなくなった路線バスの屋根の上へと跳躍した。

「私が注意を逸らす」

そう言って彼女はバスの上から跳んだ。ソジョーンの脚のサイバネティクスに搭載された推進メントによって繰り出されるスライドやジャンプは、ほとんど目で追えないほどだ。彼女は滑りながらスピードをつけ、燃えている民間の車やトラックの上を跳んでいった。

移動しながらエネルギー・ライフルで的確に狙いをつけて何発かガンナー・ユニットを攻撃すると、それは前進を停止した。

キャノンアームはソジョーンの動きを追おうとするが、彼女のスピードについていけずロックオンできないようだった。その隙に警官や兵士たちがロボットに集中射撃を浴びせる。金属の巨体が、氷雨の中の空き缶のように甲高く鳴り響く。ソジョーンが中心パーツに最後の一発を撃ち込むと、ガンナー・ユニットはオレンジ色の煙と炎を上げて爆発した。

金属が燃焼するとき特有の、突き刺すような匂いがソジョーンの嗅覚を刺激する。クライシスで初めて知り、オーバーウォッチに所属してからも度々嗅ぐことになった匂いだ。

彼女は南方、ヤング・ストリートの先に視線を向ける。オンタリオ湖のほとりに

位置する、経済と娯楽の中心エリアだ。トロントの都市部に暮らす人口は千万人以上。ダウントウンには少なくとも数十万人がいるだろう。もちろん、その中に今朝の侵略を予期していた者は一人もない。

空を見上げると、群れを成して降下するヌルセクターのドロップボッドが、灰色の雲にシルエットを映しているのが見えた。民衆の上に降り注ぐ死の雨だ。街の南端にあるフェリー乗り場への避難を援護しなければ、甚大な被害が出るだろう。当局は、生存者を市の北側に避難させるという賢明な処置を取っていた。そちらのほうが土地も開けており、起伏のある地形が地上攻撃を食い止める天然の盾となる。

しかし、エグリントン・アベニューよりも南にいる者は脱出ルートを絶たれた状態だった。

ソジョーンにできるのは南に舵を切り、ヌルセクターから一区画ずつ街を奪還しながら、避難する人々を港へ誘導することだけだ。

ヤング・ストリートとジェラード・ストリート・イーストの交差点

6:46 PM 東部標準時

ソジョーンと味方の部隊がダウントウン地区の方向にたった数キロ南下するの、何時間もかかった。降下したドロップボッドは、ヌルセクターの戦闘用オムニックであるヌルトルーパーとスライサーを大量に街に放っていった。どちらもオーパーウォッチに参加していた頃に遭遇した機体だったが、明らかに改良を施されている。煙の中からさらにヘビー・ガンナーが姿を現した。それだけではない。遠くに見える大型ボッドはソジョーンが見たこともないオムニックを載せていた。新兵器が投入されることによる影響を考える余裕はなかった。旧バージョンのユニットだけでも、見渡す限りの市街地をめちゃくちゃにされてしまったのだ。

ヌルセクターのユニットはそれぞれの役割に特化した設計で、プログラムをフルに活かせる地点へ配備される。初期段階の侵略はヌルトルーパーが担っているようだったが、ソジョーンが目じたのは新型の敵——機動力が高く、頭やパワーコアを狙いにくいホバー・ユニットだった。

ソジョーンにできるのは南に舵を切り、ヌルセクターから一区画ずつ街を奪還しながら、避難する人々を港へ誘導することだけだ。

改良型スライサーたちは狭いエリアに入り込み、初歩的な防衛設備をプラズマビームで切り裂いていく。しかし、そのスライサーも新型ユニットに比べれば虫のように小さく見える。新型ユニットは圧倒的な巨体で、全身がアーマーで覆われ、頭

ソジョーンにできるのは
南に舵を切り、
ヌルセクターから
一区画ずつ街を奪還しながら、
避難する人々を港へ
誘導することだけだ。

部からはサイのような角が突き出ている。大型の機体ではあったが、驚くほど身のこなしが素早い。

ソジョーンは目のインプラントによって、普通の人間よりも遠くを見渡せる。しかし、今日ばかりはサイバネティクスがもたらす超人的な感覚が憎かった。これから起こる大惨事を目の前にはっきりと突きつけられているのだ。ヌルトルーパーは民間人を市の中心にそびえるビル群の間に追い込んだ。群衆には逃げたり抵抗したりするほどの冷静さはなく、侵略者にとっては恰好の餌食だ。

ありあわせの物で作ったバリエードやオムニックの進行を妨害するために置かれた車両は、スライサーのプラズマビームでやすやすと破壊される。民間人が身を寄せ合っている狭い区画への進路をスライサーが切り開き、サイのようなユニットがそこを叩き潰す。ソジョーンは思わず目をつぶる。

状況は刻一刻と最悪の事態に向かっている。ソジョーンが率いるカナダ軍兵士と緊急タスクフォースの寄せ集め部隊も、もう二十人ほどしか残っていない。最初は百人以上いたのに。ソジョーンはその事実を重々しく噛み締めた。

彼女は本当に久しぶりに、オーバーウォッチで過ごした日々を懐かしんだ。ここしばらくは昔を思い出しても後悔しかなかったはずなのに。感傷はさながら首に巻き付く錨の縄だ。過去の出来事に浸る意味など本当はないはずだった。

すべてが崩壊した後、一人になりたいと願ったのは自分じゃなかったのか？ソジョーンは自分の思考に噛みつきたかった。それでも、今ここにウィンストンがいて、街灯から飛び移り隣で戦ってくれたら……不屈の精神と戦術眼をもつジャックが背中を守ってくれたら……ついそんな想像をしてしまう。腹の奥に小さな痛みを感じる。切望だ。

でもオーバーウォッチはもう消えた。それは当然の結果だった。

ガンナー・ユニットが放ったミサイルがソジョーンの頭上を飛び抜ける。推進

剤に目を刺激され、場違いな回想から我に返った。ミサイルは通りの銃撃戦を避けた民間人の一団が隠れるカフェに吸い込まれていった。爆発はブロック全体を揺らし、ビルの窓は砕け散り、ソジョーンの部隊にガラス片が降り注ぐ。

悲しんでいる暇などない。彼女は地下鉄の出入り口近くで凍りついている小柄な少女二人に向かって駆け出していた。

動け！ソジョーンは自分を鼓舞し、近くのヌルセクターに弾を打ち込みながらサイバネティクスの力の限り跳躍する。ヌルトルーパーを一体倒し、その体を盾代わりに使って、すんでのところ子どもたちの前にたどりつく。ソジョーンは片手で彼女たちを抱き寄せながら、もう片方の手でヌルトルーパーの部品を頭上に抱えて降り注ぐガラスを耐え忍ぶ。金属の装甲が甲高い音を響かせる。

「親御さんはどこ？」

ソジョーンが子どもたちに尋ねると、一人目の少女が妹の手を握りながら、声を震わせ答える。

「あの……中に……」

二人目は、炎と煙に包まれたカフェを指差した。少女は何度も口を開きかけたが、そのたびに悲痛な泣き声が漏れるだけだった。

ソジョーンは二人を抱きしめることしかできなかった。開けた通りを避け、敵中に切り開いた道を南に向かうように言い聞かせた。静かな声で姉のほうに指示するのが精一杯で、とてもではないが励ましの言葉などかけられない。少女はどこか遠い目をしながら、涙を拭って頷いた。

ソジョーンにできることと言えば、一時の不安を和らげ、傷が癒えるまで生き長らえてくれることを祈るだけだった。今までの経験を通して、彼女は知っていた。どれほど長く生きて、戦争は傷として残ることを。

ベイ・ストリートとウェリントン・ストリートの交差点

10:18 PM 東部標準時

煙に覆われた地平線に太陽が吸い込まれた頃。ソジョーンは侵略軍に対してダメージを与えた手応えを感じていた。どんどん少なくなっていく味方を率いて、三時間ほどでヌルセクターを数百体も駆逐していた。ようやく、ヤング・ストリートの南端にたどり着いた。高層ビルの間から、オンタリオ湖の冷たく波立った湖面が見える。ヤング・ストリートを確認したと判断し、ソジョーン一行は西に直角に曲がってウェリントンに入る。ホッケーの殿堂と裁判所を通り過ぎ、ニュークイーンズ

ソジョーンにできることと言えば、
一時の不安を和らげ、傷が癒えるまで
生き長らえてくれることを
祈るだけだった。
今までの経験を通して、
彼女は知っていた。
どれほど長く生きてても、
戦争は傷として残ることを。

トリートにあるトロントの商業・娯楽街に向かう。この地区は曲がりくねった道路が縦横に伸び、袋小路や行き止まりだらけの道に観光客向けの施設が並んでいる。

追い込まれば袋のネズミだ。

ヌルセクターの武器はコンクリートやガラスや鋼鉄を、濡れたティッシュのようにいとも容易く切り裂く。

流れ弾が病院の予備電源を撃ち抜いたり、学校の壁を貫通したり、ラッシュの時間帯の地下鉄トンネルを崩落させうる。この規模の侵略で起こりうる悲劇は、それこそ星の数ほどある。

最後にヌルセクターと交戦してから五分ほど。ソジョーンは生き残ったメンバーの様子を気にする。個人的なつながりはなかったが、戦いの中ですぐに彼らとの絆が芽生えたのだった。

ウェリントン・ストリートを西に進みながら、彼女は瓦礫の下敷きになった死体を数えた。業火につながる足跡を数えた。多くの生き残りがいるであろう倒壊したビルを数えた。救助にまわせるような人数もない。

これこそが戦争の恐ろしさだった。そこには栄光などない。無実の命が、考えの及びもしない対立に巻き込まれ、理不尽に消されているだけだ。ソジョーンは対爆構造の自室に置いてきた、飼い犬のマーフィーのことを思い浮かべた。昨夜は深夜に散歩をせがまれ苛立っていたのに、今は彼女が玄関でクーンと鼻を鳴らしているのを聞きたくてたまらない。

昨日のことなのに、もう十年前のように思える。この街はもはや彼女が愛し守ってきたトロントではない。冷たい鋼鉄の手で掘られた、巨大な墓地だった。自分のサイバネティクスの手と同じだ。クライシスの暗黒時代を思い出す。トロント全域が身元も分からない死体で埋め尽くされようとしており、真っ黒な煙の柱がオンタリオ湖の水面に反射していたのを覚えている。破壊された街を見ていると、あの頃の暗い記憶がデジャブのように蘇る。ソジョーンは数回瞬いた。

ビュッ！

ガンナー・ユニットが五体、路線バスや店の残骸の上に降り立った。それらが同時に放った大量のミサイルが、街を稲妻のように引き裂く。近くの裁判所が爆発し、事務用品と焼け焦げた衣服が紙吹雪のように宙に舞う。

生き残っていた部隊のほとんどがこの攻撃に巻き込まれ、残りは押し寄せる無慈悲な破片で分断された。ソジョーンは周りで燃え盛る破壊を見渡す。苦悶がみぞおちを渦巻いていたが、乾ききった喉の奥から言葉をどうにか引きずり出して、目を刺すような赤茶色と黒の炎に向かって声を張り上げた。

「生きている者は南のフェリー乗り場に向かって！夜明けまで暗闇に紛れて行動するように。民間人を見つけたら守るのよ。合流できる者は私の所へ！」

ソジョーンは少しだけ待ってみたが、遠くでヌルセクターのユニットがガシャガシャと動いている音しか聞こえなかった。

彼女は犠牲者たちに黙祷を捧げてから、むき出しになった地下鉄の入り口に飛び込んだ。

スパディナ・アベニューとレイクショア・ブルバール・ウェストの交差点
9:48 AM 東部標準時

朝日が崩壊した街を照らす。黄色い日光の細い筋が、トンネル内をところどころスポットライトのように照らしている。ソジョーンは通用ハッチからハーバーフロントセンターへ這い出た。そこは裕福な観光客が訪れそうな施設が並ぶ、広大なレイクサイドリゾートだった。オンタリオ湖を見渡す景観。CNタワー。港の複合施設では、フェリーに乗って様々な場所から訪れた人々が州内でも屈指の食事を楽しめる。彼女は疲れた目で敵を探したが、黒煙しか見えない。

今の彼女は、普段の自信と自覚を失いかけていた。トレンプレーと通信が絶たれた状態で、最善を尽くした。しかし命を救うという大義名分のもと、部隊を壊滅状態に導いてしまった。孤独という一時的な安全を得た彼女は、愛する街が燃えてい

るのを眺めている。ヌルセクターのドロップボッドが鉛の雨のように次々と投下され、ビルを壊し地面に大きなクレーターを作っていた。

どんな歴戦の兵士でも、この光景を見ればそれが民間人にとって何を意味するかを理解し息を飲むだろう。

サイボーグである彼女は、あと数時間は戦えるだろう。しかし、それまで守るのが残っているだろうか？これ以上トロントを守るための動きはない——戦闘機が撃ち落とされるのも、カナダ軍と警官隊がなぎ倒されるのも見てきた。

残った者たちも、もう少しで無数のヌルセクターに圧倒されてしまうだろう。

「助けて！誰か！どうか手を貸してくれ！」

ソジョーンの心にかかっていた迷いと後悔の霧が一気に晴れた。勢いよく振り向き、緻密な動きでライフルを構える。視線の先ではファストフード店の制服を着たオムニックが、ヌルトルーパーに追われて狭い路地のほうへ追いやられている。ヌルトルーパーはわずかにライフルの射程範囲外だったが、ソジョーンは威嚇射撃をしてヌルトルーパーの注意をこちらに引こうとした。

だが、妙なことにヌルトルーパーは彼女の攻撃に対しては肩越しに申し訳程度の反撃をするだけで、オムニックを追い続ける。ソジョーンは撃ちながらそちらに向かって駆ける。手遅れになる前に襲撃者に追いつかなければ。ヌルトルーパーはオムニックの首をつかむと、暴れる彼を路地の奥に引きずり込む。悲鳴はすぐに聞こえなくなった。

近づいたソジョーンは、ヌルトルーパーに撃たれないよう注意深くビルの壁に張り付きながら路地を覗き込んだ。そして敵を吹き飛ばそうと路地に踏み込むが、そこには誰もいなかった。彼女は目を見開く。

ヌルセクター・ユニットがごくごく普通のオムニックを誘拐するなんて、聞いたことがない。そんなことをする理由が分からない。ヌルセクターが捕虜を取ろうと方針転換していたなら話は別だが……。

警戒しながら路地を調べても、開けばなしの下水道の蓋と、そこから漂ってくる悪臭しか残されていなかった。

ブツ、ザーッ……ソジョーンの通信システムが突然復旧して彼女を驚かせた。

「こちらソジョーン。応答を求む」

「チェイス！トレンブレイだ……生きててよかった。通信が切れてからずっと呼びかけてたんだ。

軍用の周波数は全部妨害されていたが、信号をいじってようやく使えるチャンネルを見つけた」

しかし命を救うという大義名分のもと、部隊を壊滅状態に導いてしまった。孤独という一時的な安全を得た彼女は、愛する街が燃えているのを眺めている。

「被害は？そっちは大丈夫？」

ソジョーンは安堵感を隠しきれずにいた。

「“大丈夫”とは言えないが、司令部はまだ無事だ。今どこにいる？生き残った兵士の一部がハーバーフロントに到達した。フェリーはもうすぐ満員で出航してしまうが、被害を免れた船に総出でダウンタウンに取り残された市民の救出に向かわせる」

避難警報が再び聞こえてくる。大都市のいたるところに、何千という数の隠れたスピーカーが設置されていたのだ。

ソジョーンはほっと息をついた。トロント市街では大きな被害が出てしまったが、彼女の寄せ集めの部隊は水辺に通じるルートを切り開き、政府が民間人に避難指示を出すだけの時間を稼げていたのだ。

ガン！ガン！

それは木製の何かが金属に当たる音。具体的に言うと野球バットでヌルセクターのアーマーを叩く音だった。振り向いてみると、オムニックと人間の女性がヌルトルーパーと前進するガンナー・ユニットを相手に戦っていた。おそらく二人とも勝ち目はないと分かっているけど、最後まで戦い抜くつもりだろう。

二人は敵に取り囲まれ、ヌルトルーパーが近くのオムニックたちをさらっていく。ソジョーンはオーバーウォッチの新人としてジャックと共に戦った日々を思い出す。その頃は人々がいとも簡単に被害者になっていく様子を目にしたが、今、彼女の目の前には“被害者”などいない。人々は、自由と安全のために戦う覚悟をし

ていた。街は燃え、死者が増え、心身ともに疲弊していても、彼女と共に行動した兵士や警官や救助隊員は決して足を止めなかった。

ソジョーンは、カフェで両親を亡くしたであろう少女たちを思い出す。姉妹の目には恐怖が浮かんでいたが、しっかりと繋がれた手からは別のもも感じた。それは、戦う者だけが分かる形のないもの——なけなしの勇気だった。

オムニック・クライシスでは、今よりもましな状況下でも諦める人たちを見てきた。

人々は逃げ惑い、降伏し、恐怖に身を寄せ合いながら死んでいった。

今は人間とオムニックが肩を並べ、自分たちの街を守るために戦っている。

彼らの故郷であり、彼女の故郷でもあるトロントを。

ソジョーンはヌルセクターの侵略者に正確無比なライフル射撃を浴びせる。敵は倒れ、女性とオムニックは生きのびた。また明日も戦える。その姿に胸が熱くなる。

ブォー——！ソジョーンの背後でフェリーが出港を告げる。振り向くと民間人を大勢乗せた最初のフェリーが安全なオンタリオ湖上へと滑り出していく。デッキまで満員の船の手すりにより掛かる人々の姿は、リゾートビーチへと向かうクルーズ船を想起させる。しかし、向こう側で待ち受けるのはビーチでもカクテルでもない——ただ生き延びたという事実だけだ。

朝、地下鉄トンネルから這い出したソジョーンにのしかかっていた心身の疲弊は消え去っていた。その代わりに残ったのは自信と、誇りと、自分を前へ前へと突き動かす、くすぶるような怒りだ。それさえあれば、戦い続けられる。

戦い抜いてやる。たとえ最後の一人になったとしても。